

## マンドリニストの犯罪

＝マンドリン・ギター界の社会システム論的考察＝

本井 理

### ◆序文

おどろおどろしいタイトルに驚かれたことと思いますが、最初にこの連載（註：この序文はオリジナル版、ほかに日本マンドリン連盟中部支部会報向けの序文がある）を始めようと思いついた動機について述べたいと思います。

実は、さる5月21日（註：1995年5月21日）に開催された「第784回札幌市民劇場マンドリン・コンサート」実行委員長としての反省を前号支部会報No.127（6月1日発行）に掲載したところ（註：末尾参照）、同好の皆さま方から多数のお電話やお手紙をいただきました。このような反響があったのは、私が支部会報の編集に携わるようになってから初めてのことです。このコンサートに参加されなかった方からのご意見が多かったのは意外でしたが、すべて「まったくそのとおりだ」とか「よく書いてくれた」とか「これまでの胸のつかえがおりた」といった共感の言葉で、中には「まるで自分のことを書かれているようで反省した」といったご感想を寄せられた方や、本州在住の方から「これでもまだ書き足りない」という叱咤激励のお電話もありました。

一方、「書き過ぎだ」といったご批判や、「特定の誰かを指しているのでは」といった勘繰りも相当あったと聞きましたが、私に対する直接のクレームはありませんでした。

こうした反応の現れ方から、こと「札幌市民劇場マンドリン・コンサート」運営の問題に限らず、また札幌圏・北海道以外も含めて、現在、マンドリン・ギター演奏団体はそれぞれが共通の問題点を抱えており、それら諸問題の存在を直視したくない方々でさえ現状を積極的に肯定するほどの確信を持っていないのではないかという推測が浮かび上がってきます。

確かにマンドリン・ギター界には、一般の社会常識から大きくかけ離れた行動規範をもっている方々が多いように見受けられます。このような傍若無人の人物は、断固としてこれを拒否し、排除して行かなければなりません。しかし、そうした非常識な行動の具体例を列記するだけでは前述の勘繰りのような矮小な個人批判に陥ってしまい、単なるグチに終わるだけで何ら得るものがないのです。

必要なのは、こうした異常な人間群を現出せしめ、非常識な行動（「社会病理現象」）を許容しているマンドリン・ギター界の「社会構造」を分析することではないでしょうか。その病理構造を解き明かすことこそが二十一世紀に向けた斯界発展の礎を築くための第一

歩だと思うのです。

特に北海道においては、一昨年の九島勝太郎先生（註：1993年9月26日没、札幌プレクトラム・アンサンブル創設者で日本マンドリン連盟北海道支部初代支部長）、昨年の酒井正忠先生（註：1994年8月6日没、小樽プレクトラム・ソサエティ＝現在消滅＝創設者で日本マンドリン連盟北海道支部副支部長）、そして本年は小林啓一郎先生（註：1995年2月5日没、釧路マンドリンアンサンブル名誉会長、日本マンドリン連盟顧問）と草創期からの指導者の訃報が相次ぎ、活動の在り方を方向付ける支えを失ってしまいました。また、斯界の足腰に当たる中学校・高校の同好団体は衰退の一途をたどりつつあります（小学校はすでに消滅）。本当にこのままでよいのでしょうか。

私の小論が投じる一石で同好の皆さま方の論議が高まることを期待して止みません。

## 第784回札幌市民劇場マンドリン・コンサートを終えて（参考）

実行委員長 本井 理

今年度の実行委員長を引き受けるに当たって、支部会報No.125に掲載した通り①観客動員1千人以上、②単年度黒字決算の達成、③運営ノウハウの蓄積とフィード・バック、の3つを目標として掲げましたが、残念ながら①と②は達成できませんでした。しかし、③については練習や進行、集客といった運営上の諸問題を解決する上での根本的な命題をはっきりと認識することができました。

この「札幌市民劇場マンドリン・コンサート」は、本道のマンドリン・ギター界の歴史そのものであると同時に、各団体が共通して抱えている構造的な問題がそのまま反映されているように思われます。その根底に流れているのは「自己満足さえ得られれば、ほかのことはどうでもよい」というエゴイズムにほかなりません。具体的に、演奏会を構成するいくつかの要素にそって考えてみましょう。

たとえば、毎回、「1stしか弾けない」という不可解な人々が出現しますが、こうした人々は「合奏がチームプレーである以上、どのパートにも大切な役割がある」という認識に欠けているといわざるを得ず、年齢とともに腕前が衰えているにもかかわらず常に同一メンバーが1stに居座ることで後進の発展の芽を摘んでしまっているのです。

この「1st 帝国主義」は練習の際も如実に現れており、他パートとのハーモニーや掛け合いを無視してメロディーラインであろうがなかろうが身の毛もよだつ汚い音が常に聴こえてきます。さらに、そういう困った奏者に限って練習の出席率が悪く、そのくせ、当日の席次が前でないと不満を漏らす傾向があります。

エゴイズムは1stだけの問題にとどまるものではありません。どこの団体でも少数の「運営に苦勞しているメンバー」と圧倒的に多くの「ただ弾くだけのメンバー」との二極分化が見受けられますが、前者に属する人は必ずしも好き好んで仕事を背負い込んでいるわけではありません。これに対して「弾くだけの人」は裏方の苦勞をまったく気遣うことなく、遅刻や忘れ物などをして平然としているばかりか、連絡を徹底させようとしたりすると文句ばかりいいます。

善意で演奏を支えている仲間への思いやりすらない人々が、観客である一般市民のことも考えるはずがありません。それが親しみにくい選曲や聴くに耐えない低レベルの演奏となってあらわれ、毎年、少しずつファンが失われてきたのです。

世間一般ではマンドリン・ギター音楽の人気は確実に衰えつつあり、たまたまここ2年ほど客の入りがよかったからといって、まったく安心することはできません。昨今の厳しい環境は、内外に対して私たちが積み重ねてきた救い難いエゴイズムの報いにほかならな

いのです。

しっかりした技術も持たず、豊かな音楽表現ができないにもかかわらず、キャリアだけでポジションが定まり、それを背景にせっかく入門してくれた学生や初心者を「他を圧する大音量」や「装飾だけに金が掛かっている駄楽器」や「我流で貧弱な経験則」などで威圧する人間が幅を利かせるマンドリン・ギター界の現状は、まさに「異常だ」という一言に尽きます。

私たち一人一人が初心に立ち返り、仲間の奏者や観客とともに合奏のよろこびを分かち合う音楽本来の姿を取り戻さなければ、今後はこの行事の継続どころか、マンドリン・ギター音楽そのものの存亡に関わる事態になるといっても過言ではないでしょう。

(日本マンドリン連盟北海道支部幹事)